

高山れおな選

春風太古の巨鳥過ぐる如

(藤沢市) 朝広三猫子

緑陰はみんなの素顔見えろと

(厚木市) 北村 純一

推し活のマチネ終わりにて春が行く

(奈良市) 八島 賢次

雨ふふ風去来や夏の蝶

(船橋市) 齊木 直哉

追ひ回す執念の蟻辛虫狩る

(さいたま市) 春日 重信

茶髪めく竹の秋てふ一区画

(美作市) 駿河 亜希

遠足の歓声湖に飛ばしたり

(大崎市) 宮嶋 孝

雨降れば母のぬしあの子供の日

(赤穂市) 矢野 君子

吾の母も子の母もなき母の日よ

(東京都中央区) 久塚 謙一

毒の有無確かめ野草炊く五月

(奈良市) 藤岡 道子

【評】朝広さん。この猛烈な風、まるで巨鳥の羽ばたきみたいだ！ 大胆な幻想が痛快。北村さん。「みんなの素顔」という言い回しに、緑陰の柔らかな光と空気を思う。八島さん。マチネ果てての余韻の味わいが、惜春の情へと重なってゆく。

小林貴子選

惜しむかに夕日を残す麦畑

(兵庫県太子町) 一寸木詩郷

なるのたびひりつく春の痛みかな

(盛岡市) 内藤 賢一

中学に入れば無口や鯉のぼり

(横浜市) 岡部 豊

柏もち二つずらして佐渡ヶ島

(東京都練馬区) 小池 来翔

五月雨に大方委ね夢に入る

(三島市) 高安 利幸

こどもの日十一歳の兵士の死

(久留米市) 塚本 恭子

書生っぽい気分抜けぬか青蛙

(海都市) 楠木たけし

外階段上の劇場寺山忌

(東京都世田谷区) 野上 卓

あぢさるのふさぐ郵便配達路

(浜松市) 尾内甲太郎

泳ぎつつ残る決意の通し鴨

(嘉麻市) 松井 春光

【評】一句目、麦が黄に色づくころ、麦畑と夕日の景には絵心が誘われる。二句目の「なる」は地震。震度五が来るたびに三・一が痛みとなって襲う。三句目、あんなに多弁だった小学生が。四句目、柏餅二つで佐渡島の形を作る小学四年生。

長谷川權選

水俣忌握り拳の中にある

(横浜市) 三玉 一郎

那智の瀧春夏秋冬浴々と

(新宮市) 中西 洋

九条の八十年の夏惜しむ

(福島県伊達市) 佐藤 茂

水しぶき見えるがごとく鯉職

(川崎市) 長畑 なみ

ふらこの二つの揃ひゆく高き

(静岡市) 松村 史基

メーデーやむかし日本に社会党

(大村市) 小谷 一夫

かたくなは老いのはじめか子どもの日

(越谷市) 新井高四郎

母の日や我を案ずる文残る

(那覇市) 上江洲一石

麦の秋俳句で人と争はず

(我孫子市) 渡辺 肇幸

百一歳春蘭の歌人逝く

(八王子市) 額田 浩文

【評】一席。七十年経っても終わらない水俣病との闘い。水俣忌は五月一日。二席。豊かなご神体をたたえる。夏の句。三席。九条とくれば、やはり夏だろう。原句は「八十年の春」。十句目。歌人の岡野弘彦さんへの追悼句。百一歳の春爛漫。

大串 章選

春雨や濡れてゆくにはやや強し

(横浜市) 瀬古 修治

深海を魚竜と遊ぶ大朝寝

(東京都足立区) 望月 清彦

いざ菖蒲葉先尖らせ天を衝く

(東海市) 大河内 明

晩年もまたよからずや新茶汲む

(山梨県市川三郷町) 笠井 彰

桐咲くやこの世は祈ることばかり

(本巣市) 清水 宏晏

帰る家なきふるさとや鳥帰る

(福岡市) 三十田 燦

農道の混み合つてゐる五月かな

(東京都杉並区) 伊東 澄子

香水は捨てず使はず母百一

(宜野湾市) 筒井 慶夏

としやぶりへ飛び出してゆく燕かな

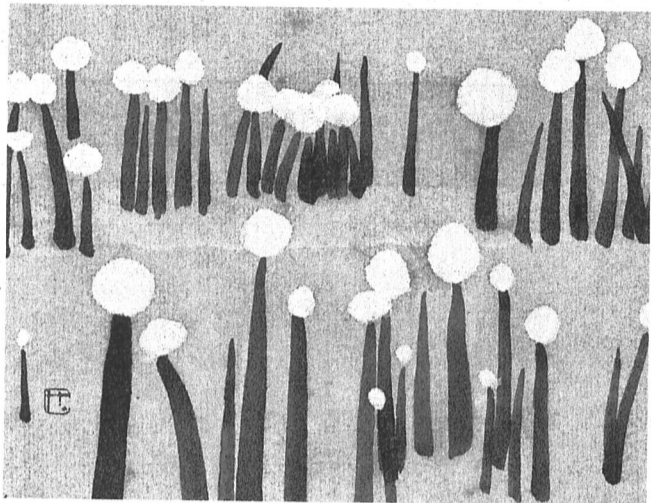
(松山市) 正岡 唯真

屋敷の子今日はどこまで行つたやう

(境港市) 大谷 和二

【評】第1句。月形半平太の有名な台詞「春雨じゃ、濡れてまいろう」を踏まえて一句誕生。第2句。大朝寝をして大きな夢を見たのだ。「魚竜」が意表をつく。第3句。同音異義語を巧みに活用。菖蒲の葉先から「いざ勝負！」の声が聞こえる。

朝日 俳壇 歌壇



北村さゆり <ネギ坊主たち>

俳句時評 石牟礼道子の「うた」

岸本 尚毅

〈折るべき天とおもえど天の病む〉は石牟礼道子の俳句。折るべき「天」さえ病んでいる。意味の上では暗澹たる作品だ。だが五七五の調へのゆえだろうか、必ずしも絶望一辺倒ではなく、病んでしまった「天」を慰藉しているかのような思いも感じられる。

水俣出身の武良竜彦の近刊『石牟礼道子 たましいを浄化する文学』(コールサク社)は、石牟礼の文学の全体像を描出し、その一部に俳句があることの意味を問う。たとえば二〇一二年作の〈月影や水底の墓見えざりき〉という句。石牟礼はダムに水没した村を素材にした小説「天湖」(一九九七年)を書いたが、その十余年後、小説よりはるかに簡素な俳句という形式に「水底の墓」への思いを再び託した。

式が、余計な「近現代的な文学的要素」の入り込む余地の少ない形式であったことと「だ」と本書はいう。「石牟礼道子にとって俳句とは、死者の魂に添って詠う『うた』であった」(本書)。

第69回短歌研究新人賞 短歌研究社主催。水本麻衣さんの「いつも寝顔を褒められている」(30首)と、岡本恵さんの「影の名前」(同)に決まった。

◇朝日歌壇 入選取り消し 5月24日付の歌壇に掲載した「帰りたい帰りたいとふ入所者が家族が来ると何も言はない」は、類似した先行歌がありましたので、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

佐佐木幸綱選

蓬独活薇蕨野蒜春の山菜の漢字いかめし

(つくば市) 小林 浦波

亡き兄と同姓同名の人ありて春の叙歎の紙面に見入る

(東京都) 鹿野 文子

高野公彦選

連休の憲法、みどりの、こどもの日、浮かれるなかれども瀬戸際

(札幌市) 田巻 成男

連休は時空を越えて旅をした地元の本屋とミニシアターで

(名古屋) 百々 奈美

永田和宏選

戦争を知る人なきを待てるかに日ごと高まる改憲の声

(加東市) 藤原 明

たくさんの人を殺せば売れる武器 武器を売るとはそう言う事だ

(周南市) 松岡 哲彦

川野里子選

☆戦争が日常の色奪いゆくモノクロームのポテトチップス

(奈良市) 山添 聖子

☆兵たりし父の犯し罪ゆえかわが家に黄砂今年も多し

(西宮市) 市橋 昌己

かつての戦地から飛び来たのよう。四首目、ダイナミズムに溢れられて新鮮だ。